

政石 蒙（道夫）

松野町



政石 蒙 (1923～2009)

松野町に生まれる。15歳のころ、ハンセン病を発病する。昭和19（1944）年、入隊。従軍して満州に派遣される。敗戦でモンゴル人民共和国に連行され、捕虜となる。昭和22（1947）年4月抑留中にハンセン病であることが分かり、一人で小屋に隔離される。食事を運ぶ当番兵以外に訪れる者は誰もいない壮絶な孤独と絶望の中で、初めての短歌を詠む。

足元の土をならして書きつける孤独の文字をよぎる蟻一つ

昭和22（1947）年9月抑留を解かれ、復員。11月帰郷。

復員1年後、ハンセン病の療養所・大島青松園（高松市）に入所し、短歌を作り始める。ここで政石は、自らの病や体験を歌に詠む。

昭和25（1950）年、短歌結社「創作」に入社。歌人・長谷川銀作氏に師事して、本格的に短歌を発表し始める。昭和39（1964）年、第一歌集『乱泥流』を出版。昭和43（1968）年、短歌文学の分野で傑出した功績をあげた者に贈られる牧水賞を受賞した。4年後の昭和47（1972）年には、若山牧水系の歌誌「長流」創立に参加して、編集委員を務めながら多くの歌を詠み、歌文集『花までの距離』、歌集『遙かなれども』の3冊の歌集を出版している。

変型を双手に遺し病癒ゆ何かを握り緊むるかたちに

政石は「らい予防法」廃止運動にも参加し、病気に対する偏見と差別をなくすために尽力する。「らい予防法」は、政石や多くの人々の努力によって平成8（1996）年に廃止された。また、平成12（2000）年「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟に参加し、原告として陳述するなど、人権回復のために闘い、平成13（2001）年原告勝訴の判決を手に入れた。

足枷の「らい予防法」をそのままに減びては惨めすぎはしないか

長年に渡る闘いの末、「らい予防法」はなくなり、裁判には勝訴したものの、ハンセン病回復者への偏見や差別はなくなっただけではない。政石は次のように詠む。

ハンセン病癒ゆるとも人に非ずとふ投書を前に何をか言はむ

政石は、モンゴル抑留中の隔離小屋で最初の短歌を詠んでから、平成21（2009）年4月、大島青松園において85歳で亡くなるまで、短歌を詠み続けた。政石にとって歌を詠むことは、厳しい差別の現実を生き抜くことであり、それは同時に人間としての尊厳を取り戻す闘いでもあった。晩年の次の一首は、希望を見出す歌のように感じられる。

見送りのわれの見る水尾帰りゆく君達の見る水尾のつづけり

[参考資料]

政石蒙 『花までの距離 歌文集』『遥かなれども 歌集』『水尾 政石 蒙 遺歌集』
愛媛県教育委員会・愛媛県人権教育協議会 「平成22年度 愛媛県人権・同和教育研究
大会資料」

松野町教育委員会 「政石さんからの伝言①～⑥」（「広報まつの2010年2月～7月号『人権の広場』より」）